

新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第6回】武漢平地に於ける追撃作戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十三年十月二十六日、旅団は右縦隊前衛となり、聯隊主力は其の前兵として〇七三〇童家河を出発、一七一〇周家崗附近に到着宿営す。

二十七日〇七三〇、宿営地出発、第二大隊を前兵とし、主力は前兵本隊となり一七〇〇甘家坊附近に到着宿営す。

二十八日〇八一〇宿営地出発、前日の行軍序列により宗埠南側地区に向い前進、一二〇〇李堪に到着警戒す。二十九日前進を起し、三十日左家岡～三十一日大石岡～十一月一日陳家灣～二日漢口入城の命を受け、張大灣宿営。翌三日漢口に向い突進中、載家山の橋梁が破壊されていた為、前進遅滞したが、一八三〇無事漢口に入城した。

聯隊は、十一月三日漢口入城と共に第6師団より警備を継承し、第一代漢口警備隊として、警備司令官沼田少将の指揮の下、附近の残敵討伐を行い、十二月三日、警備を交代して師団直轄となり、河口鎮に至り十四年三月まで師団の西地区警備隊として治安の確保に努めた。

三月に入り添田聯隊長は、第二師団司令部附に転任された。

「襄東会戦」（二代聯隊長山村大佐時代）

昭和十四年四月、春陽来復と共に、戦機江南の山野に満ち、軍は肅々として襄東平野に鋒を進めた。

聯隊は、警備任務を騎兵第十七大隊及び長滝大隊に移譲し、四月十七日河口鎮を出発、夏店～小溪河市～花園を経て二十日、徳安に至り第三師団と警備を交代した。主力は徳安附近に位置し、第三大隊を以って三陽店附近、第一大隊を以って河水店以東地区を警備した。当時第三大隊は、三陽店にて数倍の敵と相対していた。

五月九日聯隊は、三陽店北方地区の敵陣を突破して、先ず古城畷を占領した。爾後聯隊は敵五十六師を急追し、第一大隊を右、第三大隊を左追撃隊として均川方向に向い、既設陣地の敵陣を突破しつつ、十二日二四〇〇均川店に進出した。十三日安店を経て、敵五十

六師、三十四師を圧迫しつつ環潭鎮に入城して、大洪山地区に向う師団主力と合流した。

五月十五日聯隊は、大洪山に転進途中一八〇〇頃敵約千名と遭遇し之を撃破、更に朱家集北側にある頑敵を撃破し、南方高地の迫撃砲・重機を有する約千名の敵を猛攻してこの地を奪取した。二十日より戦場追撃に移ったが、折りしも大雷雨沛然として溪流刻々と増水し、歩行困難となったが敢然追撃を続行し長崗店に到着、師団直轄となる。爾後聯隊は応城において警備の態勢に移った。

「贛湘会戦」

五月下旬襄東会戦の終了と共に聯隊は、応城附近において警備と教育訓練に従事した。

八月二十二日、師団命令に依り奈良旅団長の指揮に入り、江南地区の作戦に参加することとなった。出動部隊は第百十六聯隊、山砲第一大隊を基幹とする奈良支隊のみで、師団代表として将兵一同其の栄光に感激した。当日より二日に亘り約千五百名に及ぶ初年兵も到着し、以って聯隊は古参兵を残置し、戦場の経験に乏しきも鋭気滄刺たる初年兵を以って編成を行い、教育を施し戦力の更張に努めた。この月荻洲師団長の後任として田中中将が来任せられた。

九月四日応城出発、長江埠より船舶輸送に依り武昌に終結、更に長江を遡江して九日夕、岳州に至り、続いて翌十日、焼けつく如き炎天下、猛烈なる暑気を冒して長安駟に向け行軍、十一日二一〇〇長安駟に到着、終結完了した。

九月十五日、自動車輸送に依り桃林に到り第6師団と警備を交代し、爾後の攻撃を準備した。

九月十六日〇八〇〇、江南の地、油港河河畔の最前線に於いて第二回軍旗拝受記念日の祝典を挙行し、軍旗に対し必勝を誓うと共に志気昂揚をはかった。

九月二十日未明より、第三大隊を右、第二大隊を左第一線として草鞋嶺附近の堅陣の突破を開始し、第三大隊は敵の十字火を冒して猛攻し敵中深く突入、各所に敵の逆襲を撃破しつつ遂に所命の地点たる一六四・一高地に進出した。第二大隊正面は敵の抵抗予想外に頑強にして、しかも敵兵力遂次増加の傾向にあり、戦闘意の如く進捗せず、大隊長代理村上大尉負傷するに至った。

二十一日朝、聯隊本部と共に第一大隊主力が到着、中央に増加し、一九〇〇遂に「くの字型高地」（草鞋嶺南側）の要点を奪取して引続き敗敵に追尾しつつ夜間攻撃を続行した。

二十二日払暁より、一六四・一高地東北方高地の堅塁に抛る残敵は、巧みに掩蓋を利用

し我が前進を阻止せるも、天明と共に第一線歩砲兵の適切な共同の下に猛攻を重ね之を奪取。拠点崩壊した敵は沙港河南岸に向い敗走、聯隊は追撃に移ったが、敵は沙港河北岸比家山附近の堅塁に抛り頑強に抵抗、明払暁の攻撃を準備し夜を徹した。

二十三日払暁と共に、第一線大隊は悲壮なる決意の下に比家山及び東方高地の頑敵に対し攻撃を開始した。肉弾戦を演ずるに至ったが、我が決死の勢いに吞まれ敵は堅塁を放棄し全戦に亘り崩壊を見るに至り、〇七一〇聯隊長は軍旗を奉じ第一線中隊と共に比家山東方高地に突入、算を乱し敗走する敵に全火器を排列して猛射を浴びせ殆ど其の大部を殲滅した。

聯隊は、敵の虚に乗じ一挙に沙港河の渡河を開始した時、左岸の河岸に設備したトーチカから突如自動火器の十字火を浴び、前進を阻止されたが、第一線両大隊は対岸の側防火を制圧しつつ其の大部は渡河を完了した。此の頃我が飛行機が敵の既設陣地を空爆し、益々我が志気は昂揚した。

敗走する敵を急迫して前進すると、又既設陣地に抛り抵抗をし、伝朝孫、穆家渡東南方無名部落の線に停止するの止むなきに至り、聯隊長は、第一大隊に至り直接戦闘を指導すべく前進中、伝朝孫北端に於いて右前方約百五十メートルから敵の狙撃を受け、右手橈骨に貫通銃創を受けるも屈せず戦闘を指導した。敵の抵抗は益々頑強となり、迫撃砲弾の集中、重軽機等の猛射により支隊本部と一時連絡途絶する等、我が攻撃進捗せず。聯隊長は第一大隊長前田中佐に攻撃に関し指示を与え、一時聯隊長代理を命じ、第二野戦病院に入院加療した。

諸隊を一旦整理し夜間再び攻撃を敢行、二二〇〇第一線中隊は敵陣地に対し突入、我が猛攻に敵は遂次後退の色をみせるも、残存兵は執拗なる抵抗を試み、手榴弾を投擲しつつ逆襲反撃に出る等、月明裡に壮烈なる白兵戦を継続した。

第一大隊は伝朝孫南方高地の線に、第三大隊は柴家沖の線に進出したとき、さしもの頑強なる敵も我が強襲に堪えかね、全面的に後退を開始し、二十四日〇五三〇頃には一兵の姿も見えなくなった。

二十四日〇六一〇、全戦に亘る敵退却と共に、戦場追撃を開始、遂次縦隊追撃に移り、前衛は各所に残敵を撃破し前進したが、一五〇〇王復泰附近に到達するや、該地東南側高地に迫撃砲を有する約三百の敵と遭遇。前衛第三大隊は直ちに攻撃に移るも、敵意外に頑強なる抵抗をなしたる為、本隊より歩兵一個中隊、山砲一門を増加して力攻、一八〇〇敵陣地に突入し之を奪取した。尚一部の敵は抵抗を続け之に対峙しつつ夜を徹した。

二十五日〇二一五頃より、敵は全面的に退却を開始、直ちに追撃態勢を整えたるも暗夜のため、意外に時間を要し、〇七〇〇漸く出発。敗敵を求め急迫に移った。

野戦病院にて治療せられた山村大佐は部隊に追及され、再び聯隊を指揮し本隊の先頭にあって行進した。

部隊は梓江に向い夜間追撃を敢行したが、道路は意外に険峻で、橋梁も各所で破壊されており、部隊行動は遅滞した。

二十六日一一〇〇、梓江に進出。翌二十七日〇七〇〇聯隊は本隊となり梓江を出発、一五三〇醬基橋に到着。該地附近に兵力を集結し一部を以って軍公路を挟み陣地を占領し、平江方向より脱出せんとする敵を捕捉せんとしたが、敵は我が企図を察知し退路を変更し早々遁走、数名の捕虜を得たるのみであった。

敵退路変更に伴い現配備を徹し、一九〇〇軍公路に沿い月明りを頼りに只管突進に努めた。途中先遣隊は進路上所在の敵を掃蕩殲滅しつつ、二十八日〇二四〇江口東方の舟橋に達した。連日の猛攻急迫に将兵の心労も累加していたが、平江攻略を目前に志気を鼓舞し鋭意急迫を続行した。〇五〇〇斥候の報告により、平江城内の敵は東南方に退却中なるを知り、前衛を以って平江西方高地の敵を黎明攻撃によって撃破し、引続き平江城内に殺到し残敵を掃蕩、午前中に完全にこれを占領した。

九月二十九日聯隊は、先遣隊として急遽長壽街へ敗敵を求めて進撃することとなり、一〇〇〇平江を出発。一九二〇獻宝台に到着、支隊命令により長壽街の三十三師団と交代、附近の残敵を掃蕩すべく三十日正午、第三大隊を派遣させ、主力は現在地に於いて前任務を続行した。

越えて十月一日〇七〇〇、聯隊は嘉義市に向うべく獻宝台を出発、一四二五嘉義市西方約三キロの地点に達した時、汨水河北方高地に陣地占領中の軽機を有する約三百の敵を発見し直ちに展開、之を攻撃した。敵は少時我に抵抗したが、我が猛攻により潰走したため一七三〇兵力を集結し再び前進、嘉義市において露營した。

聯隊はこの後、敗敵を掃蕩しつつ、二日長壽街、三日黄土潭、四日虹橋、五日天嶮幕阜山系を越えて南江橋、六日上塔市、七日南家瑕、八日通城に到着、以後三日間附近の村落において滞在、戦力の回復と次期行動の準備に邁進した。

贛湘会戦の作戦も概ね一段落を告げ、通城附近に集結を完了した聯隊は、前衛として十一日〇六〇〇出発し臨湘に向い前進した。

途中通過した北港附近は、第六・第九師団の苦戦を舐めたる古戦場に鑑み、掃蕩並みに通過し万全の注意を払い疎開隊形（隊形の距離・間隔を開くこと）を以って前進するも敵影を見ず、誉家橋に到着露營した。

十二日〇八〇〇土撤里に向い前進、一一二〇前兵は軽機を有する数名の敵を駆逐し、続いて前進し忠防に於いて大休止の後傳家市土撤里に到着した。

十三日〇七二〇土撤里出発、路口舗に向い前進し鵲子樹西北方名無し部落に到着。聯隊は該地に於いて宿営した。

十四日〇九三〇、聯隊長は将校を集め訓示に後、負傷箇所治療の為代理を前田中佐に命じ、漢口に先行した。聯隊は梯隊区分により臨湘に向い前進、主力は十八日〇六三〇出発し該地に到着。次期作戦の準備を開始した。

支隊は十月十七日以来、臨湘より船舶輸送を以って漢陽に兵力を集結し、襄南進攻作戦を準備した。

聯隊（第二大隊欠）は十八日より遂次兵力を漢陽に集結し、兵器の整備・弾薬・糧秣の補充をなし、鋭意作戦準備に邁進した。

当時敵第二百二十六師の主力は、仙桃鎮並びに沔陽地区に在り、又儒山周辺地区には約一千の漢陽縣自衛部隊があり、その装備は向上し行動は活発となりつつあった。

聯隊は侏儒山南方及び西方高地の敵を、一挙に撃破し北河に進出、敵を仙桃鎮南方に捕捉する為下查埠に向い前進した。

三十一日一四三〇、下查埠に於いて若干の敵を駆逐し、仙桃鎮より遂次退却しつつある敵の退路遮断のため、先遣隊となり夜半、王市口北側地区に進出した。

十一月一日、王市口附近に於いて自動火器を有する約百の敵と遭遇したが、交戦僅かにして敵は南方に退却した。

聯隊は更に前衛となり前進、一四三〇張家構附近に於いて約三百の敵を発見。直ちに攻撃に移ったが、左追撃隊の第三大隊の側背進出により、敵は抵抗の暇もなく西南方に潰走したため一挙に張家構に追撃した。同地に約二百の敵頑強に抵抗したが、諸隊の追撃により退却した。同地附近の治安確立を以って聯隊は仙桃鎮に集結し、爾後の行動を準備した。

本作戦終了後主力は応城に位置し、警備と次期作戦準備に着手した。この作戦間負傷せる山村大佐は大命により更迭、留守第二師団司令部附に転補せられた。

(参考文献「新発田聯隊史」「聯隊歴史 歩兵第百十六聯隊」より)